

北海道を元気に

新年あけましておめでとうございます。

皆様におかれましては、つつがなく新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

北海道スタンダード研究委員会は、東日本大震災直後に“北海道を元気に、そして東北、日本を元気に”と活動を開始し、6年が経過したところです。この間、多くの皆様からご指導いただき、素晴らしい講師に恵まれ、充実した活動を続けることができました。この場をお借りして感謝を申し上げます。

昨年は、北海道新幹線の開業、リオデジャネイロ・オリ・パラでの日本選手のメダルラッシュといった元気が出る話題がありました。その一方、昨年8月の台風による大雨被害とその対応に忙殺された日々が記憶の大部分を占め、個人的には年末が近づくにつれてネガティブになりつつありました。そんな中、昨年12月に当会の勉強会でご講演いただいた北海道教育大学岩見沢校の臼井栄三先生のお話に大いに感銘を受け、元気をいただき、なんとか新年を迎えられた、そんな心境です。この機会に皆さんにそのお話の一部をご紹介します。

一つ目は、世阿弥の「風姿花伝」にある“男時(おどき)”、“女時(めどき)”です。世阿弥は、人には時の運というものがあり、人の力ではどうしようもない因果のしくみと説いています。男時とは、時運が向いて勢いがあり自分のすることがうまくいく時、逆に女時とは、どんなに頑張ってもうまく行かない時です。女時には無理をせず、時の流れに逆らうこと無く力をためておく、そうすれば大事なときにきつと勝つことができると論じています。男時、女時が

天沼宇雄(あまぬま たかお)

技術士(建設/総合技術監理部門)

公益社団法人 日本技術士会
北海道本部
北海道スタンダード研究委員会
代表



いつかは、個々の受け止め方次第ですが、大切なのは、良い時ばかりの人生は存在せず、ある時には女時として受け入れ、やがて来る男時に備えて自身の実力を蓄え、男時にはまた来る女時を想像し、謙虚に生きるという考え方です。女時を愛し、受け入れられれば、気持ちに余裕が出来て、今おかれた立場での苦しさも多少和らぐのではないのでしょうか。

二つ目のお話は、作家の平野啓一郎氏が提唱した「分人(ぶんじん)」です。企業における社員の悩みの8割は人間関係とも言われ、人間関係に悩み、苦しんでいる人はとても多いと思います。「分人」とは「個人」に相対する概念で、人はたった一つの自分を持つのではなく、状況や他人との関係の数だけ自分があるのだという考え方です。上司や同僚と相対するのはそれぞれが別の自分であり、会社を離れてもまた別の自分があり、自身はこうした様々な「分人」の集合なので、その中の一人との人間関係だけで深く苦しまなくても良いという考え方です。人は対人関係や多様な状況の中でその都度変わりゆくものであり、その関係の数だけ自分が存在し、新しい人間関係を誰かと結べばその時は別な「分人」ができ、そうすることで自分はどんどん広がり、前向きになれるということではないのでしょうか。

北海道スタンダード研究委員会は、“初心忘るべからず”(これも世阿弥の言葉)の精神で、今年も“北海道を元気にする”ために、既成概念にとらわれず幅広い活動をしていきたいと思っています。引き続き、ご指導の程よろしくお願いたします。